



スマトラの低湿地に行く

古 川 久 雄*

スマトラ東岸低地部の村はすべて川沿いである。ことにムアラという川の合流点が好んで住まわれる。人間がふえるにつれて高床の家々がやはり川沿いに建増しされて、村は次第に長くなる。しかし、川と川の間の森は依然として緑の魔境である。人々は森林産物をとりにしばしば森に入るが、森の広さと木々の成長力に比べ、人間の数とその破壊力は現在でもなおかつ弱い。

森から抽出した産物は川を通って村々へ、また港へ運ばれる。川を通って異郷の人間が入りこみ、異国の産物、文化が入りこむ。川はまた人々の生活の場である。水浴、用便、食事のしたく、洗いものなどの家事は川辺に浮かべたイカダで行う。川はまた漁撈の場である。イカダの下、木の下、川岸のくぼみにはさまざまな魚籠がしかけられる。より下流部では魚柵やえりがふえる。とまれ、熱帯降雨林を貫く川筋は、そこでの唯一の開けた空間であり、最重要交通路であり、生業の場である事情は、陸上交通が増したいまも変わらない。

一方、熱帯降雨林の農業生態研究を志す私は、川沿いの空間だけでなく、川と川の間に巨大な空間を占め、一種不気味な感じをたたえている森へふみこんでみたい気持ちを以前からもっていた。うまい具合に偶然がいろいろ重なり、インドネシア・ボゴール農科大学 (IPB) のサタリ教授から、湿地林の土壌調査経験があるスピアンディ君を京都大学大学院の学生として受け入れることとなり、彼とともに湿地林を歩く計画が1983年の10月と11月に実現できることとなった。

これまでの調査報告を検討し、広大な湿地林がま

とまって残っており、かつ多種の生態環境が展開する地域を探した。こちらの考えは低湿地帯を丘から海まで歩こうということである。スマトラのリアウ州、ジャンビ州、南スマトラが候補地としてあがった。次に、野営しながら進むのでキャラバンを組む必要がある。そのための適当な人間がえられるかどうか。また丘から海までずっと森の中だと、いかにも心細いし、携行する食料がふえ大部隊になってしまう。結局、ジャンビ州のバタンハリ流域を歩くことにした。ジャンビの町はずれ、バンソ村からN20°Eの針路をとると海岸まで約60 km、しかもバタンハリの蛇行によって全体がクンペ、タンジュン、ブルバックの3地域に分かれている。最終目標地点の海岸にはシンプルナイクというブギス人の新しい集落もある。

1983年10月13日、バンソ村村長に見送られて出発した。キャラバンは全体で12人である。いままでにIPBの調査に経験のある農民たちをブルバックの移住村から10人集めることができた。それに私とスピアンディ君である。農民たちのリーダーはパソノ(ソノ小父さん)と呼ばれる30代半ば、ジャワのウォノサリ出身の男である。他の連中もいわゆるキドゥル山地出身の愛すべき人たちである。年齢構成は30歳代がふたり、20歳代5人、10歳代3人である。彼らに比べすでに40代の私が果たしてついていけるか、最近とみにおちてきた体力を思うと一瞬不安が頭をかすめる。

キャラバンはかつぎ屋部隊とレンティス班に分かれる。荷物はまずボーリング道具。これはオランダ製の比較的軽い簡易ボーラーで、ハンドルと長さ1 mの丸のみ型切っ先、1 mの継ぎ手5本。これらをキャンバス・ザックに入れて20 kgほどの重さになる。コア試料はツヅラ箱に水平に積み重ねて入れ

* Hisao Furukawa, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

る。6m 四方のゴムびきテントが 15 kg。パンダンで編んだゴザ10枚。米 100 kg。南京豆、ジャコ、魚カンヅメ、スーパーミー、コーヒー、茶、香辛料、食料と食器類。石油 10 l、ストロンケン石油ランプ、ふつうの石油ランプ、ポリバケツ、クワ1丁、パラ（山刀）4丁。これだけの荷物を8人でかつぐ。驚いたのはそのかつぎ方である。天秤棒でふり分け荷物にしてかつぐ。テント、ゴザは頭の上にのせる。これでジャングルを歩けるのか？

バンソの村はクンペ川の自然堤防上にあり、家々のまわりにはココヤシ、果樹がこい緑陰を作る。その背後 2 km ほどはゆるくうねる台地が続く、ランブータン、ドリアン、マンゴ、マンゴスティン、バナナ、ライチなどの果樹園とゴム園が帯状に走り、ところどころにキャサバやトウモロコシ畑がある。道はしっかりと灰白粘土であり、木もれ日を浴びながら気分のいい散歩を楽しめる。この空間は日本でいうと里山、人間に手なずけられた「半自然」の空間である。みんな快調にとばす。しかし私はきょろきょろと忙しい。土をみ、高木をみあげ、畑のスケッチをする。最後の畑をすぎると前方に森が現われた。緑の壁が視野の端から端まで、うっそうと立ち、行く手を阻んでいる。高さは 25 m ぐらいでそれほど高くない。しかし、林縁に若木がびっしりと立ち、人間界をまことに明瞭な境界で断ちきっている。いよいよ緑の魔境に入るのである。

一旦森の中へ入ると、暗く、見通しは利かず、どれも似た木にとりかこまれて全く方位が判らない。そこを安全に、かつ最も速く歩くには、レンティスをきることである。レンティスは要するに、方位を決めて森の中を真っすぐに突っきることである。先頭のふたりがとぎすました刃わたり 60 cm のパラで藪をきり開き、後続のかつぎ屋部隊が通れる幅を確保する。2 番目の男は腰から 50 m のロープをたらして進む。ロープの端が目印をするすると通過すると、叫び声がおこる、「ポトン（きれ）」。先頭のパラ屋が、手近の木の幹の向こう側の皮をむき木肌を出す。スピアンディ君がそのうしろでコンパスをにらみ針路を指示する。私は木肌に番号を書く。

低湿地帯は全体としては極めて平坦な地形なのだが、森の中を歩く段になると、大変起伏が多いことが判る。ちょうどしゃくとり虫のように盛りあがっ

た木の根や板根が地表をはい、その上にさらに小枝や落葉が積もっている。したがって、おとし穴が無数にあるのと同じで、一步一步足許を確かめながら、しっかりした根の上を歩く。うっかりして踏み外すと、どすんと太ももぐらいまでおちこむ。身体を支えようと、やみくもに木につかまるのは危険このうえない。というのは、例えばスンパヤというヤシ。これはサラカヤシの一種で、その葉柄にはトゲサゴのと同様のトゲが群生している。また、ロタンの類はゆらゆらとゆれ動く葉先に、つり針状のトゲを数百もつけている。ルングスといううるし科の木もまちかまえている。これにやられて、私は肘から先が 1 cm ほどふくれあがったことがある。じくじくと汁が出て実にかゆい。倒木をくぐり、のりこえ、雨季は小川になるであろう凹みの泥にもぐり、ひたすら N20°E で進む。ともかく 50 m 歩くと全身汗まみれになる。

500 m から 1 km ごとにボーリングをうつ。木の根に当たると場所を変える。1 m ずつ試料をとりながら継ぎ手を足して 6 m の深さまでボーリングをする。せっかく無事に貫入してもカユ状の泥炭は全く試料がとれないこともしばしばである。泥炭の下は灰白色に赤褐色の斑紋がまじる、堅くしまった粘土である。台地の土だ。泥炭は 2 km 地点から急激に深くなり、4 m をこえる。6 km 地点からはさらに深く、6 m 以上となる。

最初の 1 日を歩いてがく然とした。わずかに 2 km 進んだのみである。夕方 5 時に野営の準備を始める。ソノ小父さんがクワで黒い泥炭に井戸を掘る。1 m も掘ると黒い水が出て、みるみる穴一杯に満ちる。いわゆるアイルヒタムである。しかし、川のさらさらしたアイルヒタムではなく、アラビア・コーヒーのごとくねっとりしている。

生木に石油をかけて火をおこし、アイルヒタムをやかんに汲んで湯を沸かし、なべで飯を炊く。その間、他の連中は平坦地をえらんで、稚樹やパランの多い林床をパランできり均し、その上にゴザをしき、屋根だけのテントを張る。やがて湯が沸いて「アンジェニョール（学士様）」のスピアンディ君と「ボス」の私にミルク入りのコーヒーが運ばれる。色は黒いが、少し渋いだけでコーヒーの味は全くしない。パソノ、コーヒーを入れたか？しまった、忘れてい

ました、水がもともとコーヒーマグ色なもので……。

晩飯をくうと少し気力をとり戻してマンデーをする気になる。アイルヒタムをバケツに一杯汲んで手おけをぶら下げ、木陰に入る。石ケンをとすりつけてアイルヒタムをざぶっとかぶり、サロンをまく。下着は赤黒く染まるが、いたしかたない。シャツ類の汗をすすぐのにはいい方法はそのうちに判った。夜の雨にうたれるように枝の間にひろげておくのである。できあがりには濡れてはいるが、ほどほどに汗がおち、色もつかない。

眠りにつくまでのひと時、ジャワ語でよもやま話に熱が入る。やがて、誰かがプシンデン（ワヤン芝居地唄の女義太夫）の物まねをすると、ガメランの口歌、ダランの声音が唱和されて、即席のガメランが緑のとばりにひびく。折り曲げた膝、肘の関節をぎこちなく唐突に開く、影絵人形芝居の動きをまねて立回りを演じるふたり組が、皆の笑いを誘う。スマトラのジャングルの中にぽつんと浮ぶランプの明りで、ジャワの伝統劇に興じるこの農民たち。

木綿布の寝袋をすっぽり頭からかぶって蚊の攻撃をかわしながら、夢うつつであれこれ思っているうちに、疲れがのしかかってきて朝まで一息に眠る。

朝は猿の啼声で目が覚める。深い朝靄が立ち籠めて、カメラのレンズも濡れてしまった。地表面には自分の寝姿の凹みができている。泥炭地帯なのだ。

湿地林に広がるこの泥炭の構成は一体何か？丸のみ型ボーラーで試料がうまくとれた場合、直径3cm、長さ1mのコア試料が地上に現われる。次々と継ぎ手を足して6mまでボーリングしても、泥炭ばかりで土が現われない。実に不思議な感じを受ける。湿地林に密生する木や草の遺体が数千年間積み重なって、これだけ厚い泥炭が堆積したものである。しかし、肉眼的にもとの植物組織を識別できる場合は少ない。圧倒的に多いのは、赤褐色のふわふわとした細かい泥状植物遺体である。これは地上にとり出して空気にふれると、表面が速やかに黒変する。つまり、化学的な意味での分解が速やかに進む。この植物泥を握ると、黒い水と一緒に9割方は指の間から逃げ出す。この中に時折、幹に相当すると思われる木片がはさまっている。それはかんづめのまぐろにそっくりの構造、手ざわりをもっている。ほかにも樹皮が皮膚のようにへばりついた小枝、扁平

の、多分単子葉草本の茎などがみられることがある。下端近くの泥炭は、異なる様相を示すことがある。かなり繊維質が残り、マットのように積層している。これは指の間にはさむと、しっかりした抵抗感があり、握りしめた場合ぬるっとはすべらず、ぼこぼこつつぶれる。

厚い泥炭の下には必ず白い堅くしまった粘土がある。これは沖積世堆積物ではなく洪積段丘面、それともかなり古い地形面を構成する粘土であろう。ジャンピの町がのっている、ゆるやかな起伏の丘陵面とはほぼ同じものと思う。そうだとすると、海に向かってゆるい勾配で下る丘陵が沈水し、その上に泥炭が堆積していることになる。

植物遺体が完全に分解すると何も残らないわけで、泥炭の分解度というのは微妙なものである。この微妙な分解のバランスを支配している要因は何であろう？1984年4月末に湿地林へ再度入った時の経験は、この点で実感的解答を与えてくれた。84/83年の雨季は例年になく長びいて、4月末でもバタンハリ川の水位は高かった。83年の10月に比べてジャンピの町で4mも高い。これは大変かもしれないぞと思いつつボートで60km下り、タンジュン地区のとりつき地点へつくと、案の定、前回に比べ1.8mは高い。バタンハリの水が川岸をこえて林の中に入りこんでいる。村人にサンパンを借りて500m森の中を進んで、木出し用の木馬道にとりつく。水はへそまでくる。木馬道を2.5km内陸に入っても、水はやはり膝まである。もちろん森は水につかっている。村人に聞くと、雨季の数カ月、森は水につかるのがふつうであるという。年間数カ月の湛水、乾季は湛水しないが地下水で飽和している状況の下で、泥炭堆積の微妙なバランスが達成されているわけである。しかも数千年、この状況が継続している。しかし、木の根はどんな工夫をしてこの湛水期間を耐えているのだろうか？それに、水で一杯にふくらんだスポンジのような地盤に、これだけの高木がよく立っているものである。

広大な湿地帯の中、1本のトランセクトを歩いたのみで、判ったことはまことに少ない。盲が象をなでる感が強い。木馬道をどぼん、どぼん、水におちながら歩く。えらいものにとりついた感じが身にせまる。（京都大学東南アジア研究センター助教授）